



BIRD 鳥

不思議な鳥……それは本当に不思議な鳥である。
 いつのまに、この部屋に入ってきたのだろう。ああ、そうだ。さっきドアが開いて、看護婦が何やら青い液体の入ったガラス瓶を持ってきた時だ。あの時一緒に入ってきたのだ。
 見た事もない鳥。鳥は部屋の中央、白衣の男が座っているテーブルの上に飛び乗った。
 男は慣れた様子で鳥の方へ手を差し出した。鳥は男の手から何かをしきりとついばんでいる。

不思議な鳥。全身が鮮やかな青色と銀色のグラデーションに色彩られた羽で被われているほかは、鳥らしいところがない。子猫のような愛らしいくさで、まるで人間の女のように、お尻のところに大きな羽を着けた踊り子のように見える。目は赤味がかった金色で、不思議なときか言いようのない美しい印象を持つ生き物だ。それでいて生き物の気配がなく、血の通った感じがしない。その、鳥に釘付けになっていた。鳥のほうでもこちらをしきりと気にしている様子だ。ときおり金色の目をキラリとさせてこちらを振り返る。そればかりか街の女のように横目で微笑んで見せたり、振り返ってしなを作ったりしている。そうとしか見えないのだ。

男は、指の背で鳥の羽を撫でながらこちらに向かって笑いかけた。
 「どうですか、彼女はなかなかチャーミングでしょう。そうは思いませんか？」不思議な鳥は、男が「彼女はチャーミング……」と言った時、もう一度目をキラリとさせて、美しい尻尾を振るわせ、背伸びをしながらこちらを振りかえった。
 「彼女の名はベベ、今君の思っていることは私にはわかりますよ。その通りなのですからね。かつて、彼女は僕の恋人だったのですよ。でもあんまり僕をこぞらせるものだから、この美しい羽の中に彼女を封じ込めたのです。彼女は今とても幸せですよ。僕にはわかります。だって彼女はとてもおしゃべりが好きでしたからね。今ではこんなに美しい羽をまもって、その上、いつまでも若く美しくいられるのですから、僕も、そんな彼女を見ているのがとても好きで……満足です……」
 この男はいったい何を言っているのだろう。ひどい眠気が襲ってきた。あの鳥のせいなのか？あの、金色の目を見ていると何だか変な気分になってくる。それに、しきりと動く男の手。ああ、もう眠くてがまんできない……眠くてたまらない……
 「……とうとう眠ってしまいましたね。しかしもう安心です。これからは君もべべみたいに、幸せに暮らせませうからね……」



COLUMN 日曜日

鎌倉駅前、ここに昔からある懐かしい喫茶店がある。
 30年ほど前にはどの町にもこんなおっとりとした雰囲気のある喫茶店があったものだ。時間帯によって、買い物済ませた奥さん方、高校帰りの子供達、噂話に興じるご近所の面々の溜まり場となる。
 最近では、奥さま方はフレンチレストランのランチの方がお好みであるし、子供達はバーガーショップやコンビニエンスストアにしか行かない。今ではこの店に集まってくるのはご老人の方が多いようだ。
 店内は昭和初期風の店造り、きちんと並べられたテーブルとビニールレザー張りの椅子。広々とした店の奥にはガラス張りのテラスから中庭が見えて晴れた日などはとても気持ちが良い。
 良く見知った商店街の人たちの商売の合間の憩いの場でもある。
 ある日曜日の朝、5才くらいの男の子を連れたい夫婦が家族3人でいつものように休日の朝食後の退屈をおしゃべりで過ごしていた。
 「なあ、おまえ。うちの会社で豊島屋の鳩サブレのことなんて言ってるか知ってるか？」
 「なんていうの？」
 「伝書鳩っていうのさ。仕事でなんか嫌な問題があったらさ、とりあえずあの鳩の絵のついた袋をぶら下げてお客さんのところへ行く。突っ返されるとまた、ぶら下げて行く。行ったり来たり…それで伝書鳩さ」
 「あはっ、それで結局戻ってくるの？」大人の話を耳を傾けていた子供が、話の切れ目を目ざとく見つけて入りこんだ。

「何でだろうね」
 「何だ？」
 「何で、江ノ電は二階建てじゃないんだろね」
 「何でって…たとえばだな、あれは線路が狭い家と家の間を通ってるだろう？特に和田塚から由比ガ浜の辺りは狭いだろ。二階建ての電車があんな所走ったら人んちの軒にぶつかっちゃうだろう？だからさ」
 「あ、そうか。パパ、そうだね。そうだね。わかったよ。きっとパパの言う通りだね。でも、ボクは二階建ての方が好きさ、横須賀線みたいなさ」
 「だけど、おまえあれはグリーン車だろ？あれには乗れないぜ。あれは駄目だ。お前は乗れないよ」
 「ふうん…別にいいけどさ」
 「別にって…そんな冷めた言い方しなかつたっていいだろう！」
 「だって、しんちゃんは乗ったって言ってたよ」
 「じゃあ、お前もしんちゃんの子になればいいだろう！」
 「ばかねえ、何言いつてんの？さあ、もう行くわよ。10時過ぎたから東急ストアの開店よ。今日は自転車を買いに行く約束でしょう？」
 「ばか！もう自転車はやめだ。やめだやめだ」
 「ええ！？パパ、ごめんよ。ごめんよ。もう言わないよ」
 「そうよ。買って言ったじゃない！何よ。グリーン車のことくらいでそんなに怒ることないじゃないの！わかったわよ。私は帰るわよ。自転車買わないの！いつまで待たせてしょうがないわよ！」
 「ウエ～ん。ごめんよ。もう、グリーン車乗らなくていいよあ」
 「もう、頭に来た。帰るったら、帰るのよ」
 「おい！いいじゃないか。行こう。自転車買いに行こう。」
 「ぶんぶんするお母さんを追いかけて3人は帰っていった。」

Francis Picabia

Le dessin a été fait en 1909. Le dessin s'est en ce moment qu'un dessin de son de son. Le dessin a été fait en 1909. Le dessin s'est en ce moment qu'un dessin de son de son. Le dessin a été fait en 1909. Le dessin s'est en ce moment qu'un dessin de son de son.

INFORMATION

ミルクホールでは、毎月ミルクホールで開催される蚤の市と、海見える倉庫で開催する青空市などの日程や新入荷の商品に関する情報、はじめて骨董品をお買いになる方に役立つガラクタ通信、鎌倉のご近所の噂話や、小さな物語などを掲載したミルクホールタイムスを、発行しています。
 店内にてご覧になれますが、インターネットのホームページでもご覧になれます。
 是非ご利用下さい。

ミルクホール営業時間
 am11:00 ~ pm10:30不定休

<http://www.milkhall.co.jp/>

